

令和8年度病虫害発生予察情報・注意報第2号
(斑点米カメムシ類の多発生に注意)

令和8年7月29日
新潟県病虫害防除所

病虫害名 斑点米カメムシ類 (特にアカスジカスミカメ)

- 1 対象作物 水稻 (特に中晩生品種)
- 2 発生地域 県内全域
- 3 発生程度 多い
- 4 注意報の根拠

- (1) 7月後半の畦畔すくい取り調査におけるアカスジカスミカメ (写真) の確認地点率は**平年比高く**、虫数も**平年比多い** (表、図)。斑点米による格落ち率が高かった令和6年に比べ、確認地点率は同程度で、虫数は多い。水田内のすくい取り調査では、出穂している水田やホタルイがみられる水田を主体に発生が確認され、確認地点率は平年比やや高く、虫数はやや多い。
- (2) **その他の斑点米カメムシ類**の確認地点率は平年並～平年比高く、虫数は平年並～平年比多い。
- (3) 向こう1か月は平年と同様に晴れの日が多く、気温は高いと予想されており、斑点米カメムシ類の増殖や加害活動が活発になると推測される。

表 7月後半のすくい取り調査結果

場 所	カメムシの種類	確認地点率(%)				平均すくい取り虫数(頭)			
		本年	R6	平年	平年比	本年	R6	平年	平年比
畦畔等	アカスジカスミカメ	42.7	41.9	31.5	高	15.3	7.6	6.0	多
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	56.0	44.6	38.2	高	5.1	2.7	5.0	並
水田内	アカスジカスミカメ	10.7	14.7	6.2	やや高	0.4	0.3	0.2	やや多
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	9.3	12.0	7.9	やや高	0.4	0.2	0.4	並

注) 調査日: 7月21～23日 調査地点数: 75 20回振りすくい取り

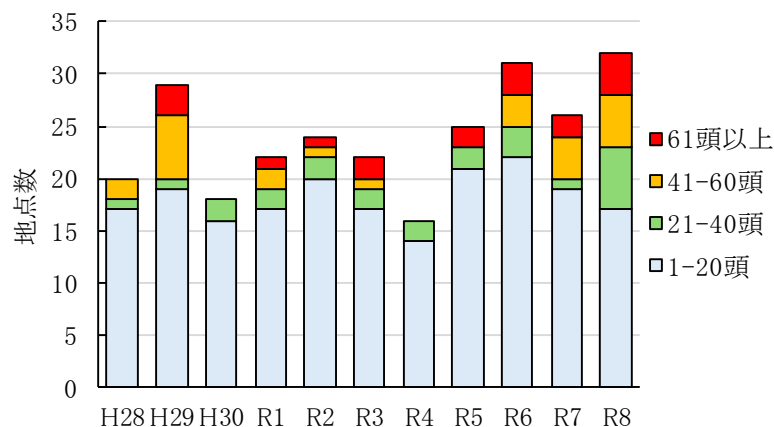


図 アカスジカスミカメ捕獲虫数別の地点数の年次推移
(7月後半、畦畔等のすくい取り調査)

注) 捕獲数が0の地点は除いた。

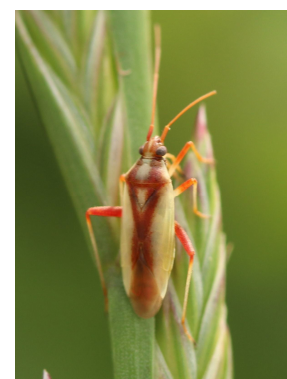


写真 アカスジカスミカメ成虫
(作物研究センター撮影)

5 防除対策

(1) 基本的な考え方

多くの斑点米カメムシは中晩生品種での発生が少ない傾向にあるが、アカスジカスミカメは中晩生品種でも発生が多くなりやすい。これから出穂期を迎える中晩生品種に対して、アカスジカスミカメを主対象とした防除対策を確実に実施する。

(2) 畦畔等の雑草管理

出穂したメヒシバはアカスジカスミカメが特に好む主要雑草で、これが繁茂する場所は成虫の飛来数が多く増殖率も高いため、水田内に侵入する成虫の主要な発生源になる。成虫は水稻の登熟期を通して水田に侵入することから、メヒシバ等のイネ科雑草が繁茂し、出穂しないように水稻の出穂前の除草を徹底するとともに、水稻の出穂後も、適宜草刈り等を行う。特に水田に近接する畦畔は発生源としてのリスクが高いため、重点的に対策を行う。

(3) 水田内の雑草対策

アカスジカスミカメはホタルイやノビエを好み、これらの雑草は水田内に成虫を誘引するとともに、幼虫の発生源にもなる。出穂したノビエはすみやかに除去する。また、これらの雑草が発生している水田では、殺虫剤（液剤または粉剤）の散布も確実に行う。

(4) 水田への殺虫剤散布

ア 基本的な対策

アカスジカスミカメに対する防除効果が高い殺虫剤を使用し、その適期に散布する（令和8年度新潟県農作物病虫害雑草防除指針を参照）。粒剤はアカスジカスミカメに対する効果が劣る傾向があることから、できるだけ液剤や粉剤を使用する。

イ 留意点

液剤、粉剤の1回散布の場合の散布適期は出穂期3日後頃（穂揃い期）～出穂期7日後である。水稻の出穂期が早まると予想されていることから、適期より遅れないよう、出穂状況を確認して散布時期を判断する。粉剤を使用する際には、周囲に飛散しないように十分注意する。

粒剤を使用する場合は、防除効果を確保するため、好天が続く日に散布するとともに、散布時は浅水にし、追加の入水は田面水がなくなってからにする。

ウ 追加防除

殺虫剤散布後も、水田内すくい取りで斑点米カメムシ類の成幼虫、特に幼虫が複数頭確認される場合は、速やかに追加防除を行う。追加防除を行う時期は収穫の2週間前までをめやすとし、農薬使用基準の収穫前日数に十分留意して、散布と収穫を行う。

新潟県病虫害防除所 電 話：0258-35-0867
